
私が魔王になったワケ

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が魔王になったワケ

【Nコード】

N8263S

【作者名】

国見炯

【あらすじ】

（前編）私は精霊族だった。元精霊族。けれど今は魔王。そんな私の魔王になったワケ。（後編）おまけの勇者サイドの物語り。前後編通して会話はほぼ無し。元精霊族と元勇者の語りのような話です。

前編・私が魔王になったワケ

私が魔王として魔界に君臨した理由。

それはよくある話といえるのかもしれない。

目覚めてから魔の者に甲斐甲斐しく世話をされている事に疑問を感じないわけではないが、今の私は魔王。立場を考えれば疑問ではなく、当たり前と受け取るべきか。

天井まで届くんじゃないかと思えるほど、無駄に長い黒い革張りのソファーに身を沈め、足を組み天井を仰ぎながら目を閉じる。

魔王になる直前まで、私は勇者の仲間の一員だった。

蘇った魔王を退治する為に、精霊族から神力の高い私が選ばれ、国を出たのは今でも昨日の事のように思い出せる。

エルフほどじゃないが、長く尖った耳をびこびここと上下に動かしながら、偉大なる精霊王に命を受けたわけだけど……正直、気に食わなかった。

思い出したように暴れだす魔王とその眷属たちは、精霊たちにとってはそれ程実害はない。大体が人間に向かうからだ。

それは人間が領土を侵し、人界にとっては価値のある魔界のものを搾取する。人間の被害は魔界だけじゃない。精霊界にも及んでいる。精霊は高い神力を要し、人の身では決して得られない力をその身に宿す。

下位の精霊であろうとも、人との間には越えられない壁が立ち上がる。だかる。

だが、人は知恵という武器を持つ。

下位の精霊を呪文で縛り、自分の手足として使役し死ぬまで神力を使い果たさせる。そんな人という存在は、魔王よりも性質が悪い。高位の精霊でも、大切な者を質にとられ使役される場合もある。中には、精霊の声を聞き、精霊と友と呼べる存在になる人がいるのも知ってはいるが、正直私は関わり合いになりたくなかった。

何故、と精霊王に問う。

返ってきた答えは、契約。

これで精霊族が活躍し人界を救えば、精霊界には手を出さないと。そう契約を結んだらしい。

それならば納得だ。

精霊の契約は絶対。魔王さえ封印してしまえば、精霊界と人界は完全に切り離される。ならば、勇者と人界を巡りながら精霊を開放していく。

皆で精霊界で穏やかに暮らすのだ。なんて素晴らしい事だろうか。

勇者と会った時も、私はあえて精霊の言葉で話した。

《エディアルセフィア・エターディーティエフィス・セレスティナ
エダ》

名前は真実のものではない。

真名は私の胸の内だけに宿っている。

とは言っても、精霊の言葉は人間には理解出来ないけれど。

「…えーと」

勇者も例外じゃなく、私の話す言葉が理解出来なかったらしい。

ふん、当たり前だ。そう思っていたら、ズキン、と痛みが走る。精霊王からの警告だ。

「…エディアルだ」

仕方ない。王に言われてしまえば名前は名乗らなければな。

「俺はアーク・ロディアス。よろしくな」

渋々名乗った私に、勇者はにこつと人懐っこい笑みを浮かべ、私に手を差し出す。勿論握手は断った。

人と、態々握手をする趣味は無い。

勇者の頬が引き攣ったような気がするが、どうでもいい。

余計な話しはなしだ。

魔王を狩りに行く。

そう思っていたのに、私は勇者一行と言葉を交わすうちに、何故か絆されてきた。勇者、僧侶、魔法使い、戦士。個として見れば、決して悪くは無い。

勇者一行は人の中でも善人で構成されるらしい。異常といえる程の善。悪がまったくないと判定されなければ、勇者のパーティには加われない。その意味は共に行動する事によって理解出来た。

人が勇者一行を異常な程の善で構築する理由は、魔王が完全な悪だからだ。完全な善でなければ、魔王は斃せない。

つまり、精霊族である私が勇者一行に加わったのは、この為だ。

魔王は勇者一行。それまでの魔の者は精霊族。つまり私が振り払う。そう役割分担を決め、ここまで進んできた。

私の仕事は、魔王の玉座に辿り着くまで。それ以上は、命をかけたの勇者たちの仕事だ。

2000年程前に復活した魔王を斃した勇者は、相打ちだったとか。その前も、その前も相打ち。

今回も相打ちだろう。

私は、勇者一行の死に際と、魔王の死を人の王に報告する役目も請け負っている。距離を取り、勇者と魔王の戦いを安全な場所から見学する。

相打ち前提とはいっても、勇者たちの旗色が悪いな。

話しに聞いている魔王よりも強い気がする。

「クツ……皆！俺に力を貸してくれ。これで魔王を斃す！！」
どうやら、勇者が勝負に出るらしい。

最後の賭けには勝ち、見事に勝利を収めるが勇者一同は慢心創痕で膝をついたり、武器を杖代わりにして何とか倒れずに済んでいる状態。

今回は相打ちじゃなかったのかと、内心では安堵を浮かべながらも、感じる違和感に首を傾げた。

なんだ？

この落ち着かない感じは。

少し離れた場所で様子伺っていた私だから気付けたのだろうか。魔王の身体から全ての負を集めたかのような、おどろおどろとした濁った力が勇者たちに襲い掛かる前に、身体が動いていた。

ああ。だから相打ちなのか。

よくある話したが、どうやら魔王という存在の核は斃されると移動するらしい。勇者を庇った私の中に、神力ではない力が宿り始める。

今回は精霊族である私が勇者を庇ったからこそ、これは私の中に留めておける。だが、もしこれをくらったのが勇者だったのなら、勇者一行に飛び火していただろう。

それ程に凝縮され過ぎた力の塊。勇者一人の身では収めきれない。

「エディ！」

「エディアルツ」

「回復が効かないよっ」

悲鳴にも似た声。

僧侶が血を吐き出す私に回復を施そうとするが、これは無理だろ

う。元々、僧侶も既に力は尽きているのだ。
恐らく、精神力が削られていない万全の状態であっても無意味だ
っただろっけど。

「魔王の核は私が抑えるから、勇者たちは逃げな
さて。勇者一行が魔界を出るまで抑えられるのかどうか。

私の神力も他の精霊族に比べて少なくは無いが、王の資格はない。
つまり、私の神力じゃこの魔力は抑えきれない。

出来ればやりたくはなかったが、これが無難か、と。

私は転移の陣を発動させる。精霊族だからこそ、人のように長い
呪文を唱える必要が無い。けれど、多少なりとも神力は削られる。

削られれば、魔王の核に飲み込まれるのが早くなるだけだが、そ
れでも勇者一行を逃がさないよりはマシだろう。

「エディ……」

勇者の瞳から、透明の液体が流れ落ちる。

泣いているのは、勇者だけじゃなかった。

「泣き虫たちだな……これは、私が勝手にやった事だ。気にするん
じゃない」

しかし、こういう時というのは何を言っているかわからないな。

「お前たちは今まで、完全な善になる為に育てられた。これからは、
自分たちの為に生きてみればいい」

道中にそれを聞いて、改めて人に嫌悪を覚えたのだが、それは言
わなくて正解だったかな。

「精霊王に、伝言を頼むよ。では、な」

勇者が私に向かって手を伸ばそうとする。

それは駄目だよ、と、私は多分……初めて、勇者に向けて穏やか
に笑った。

驚愕に見開かれる瞳。

そんな表情も出来るようになったかと思えば嬉しくなる。

陣は上手く発動してくれたのか、勇者たちの気配は魔界から人界へと移動した。良かったと胸を撫で下ろすが、この後はどうなるかまったく想像がつかない。

今の陣も、それ程神力を使うわけじゃないのに一気に、魔王の核に身体を侵食されたような気がする。

精霊族らしい白く輝く髪は、毛先の方から黒に染まっていく。

ひよっとしたら、金色の瞳も黒に変わるのだろうか。

「……完全な悪と、完全な善、か」

私は人じゃないから、人の善悪は分からない。

けれど、勇者一行が完全な善でなければいけない理由は、これじゃなかった。

きつと、今までの勇者たちも魔王の核に侵食されながらも、抑えようとしていたはずだ。それを役目とし、育てられ勇者になったのだから。

何の疑問もなく、ただつかの間の平和を人界が手に入れる為だけに作られ、送られる勇者たち。

彼らは魔王を斃し、自分たちが魔王に変わるその時まで、何の疑問もなく人を護る為だけにその身を奉げたのだらう。

善が侵食され、悪に変わる瞬間まで。

「残念だったな。私は人じゃない。善でもあり悪でもある。お前たちの崇める魔王は、幾ら時を重ねた所で還ってはこない」

魔界に在る者たち。

散々それらを殺してきた私が、魔王の核を宿した。

「このまま眠りにつこうか。覚めない眠りだ」

そして、王まで奪おうとしている。

「せめて、人に領土を侵略されないように結界だけは張っておこう。私の眠りが覚めるまで、その結界は有効だ」

身に宿る神力と魔力を編みこみ、私は魔界に結界を張る。

こんな強引な合わせ技を使えるのは、今だけ。

時期に、私に宿る神力は魔力に喰らわれ、使う事など出来なくなるだろう。

「おやすみ」

精霊族として生を受けてから千年程が経っただろうか。

その自分がこんな最期を迎えるとは思ってもいなかったが…。

「悪くは無い」

こんな最期なら悪くはない。

こうして、私は魔王になり、眠りについた。

後編・俺が勇者を辞めたワケ

あの頃の俺は、無知が服を着て歩いていたようなものだった。

生まれた時から光の属性があるという理由で、目覚め始めた魔王を斃す為に勇者としての教育を受けた。人は絶対的な善。魔は悪。魔を斃す為に、俺は勇者として日々魔法と剣の腕を磨く。

俺は、いや、俺たちは心優しい人々に囲まれ、修行し、そうして十数年間生きてきた。こんなに優しい人間を理由もなく殺す魔の者は誰かが斃さなければ。俺の身を引き換えにしても、とその時は本気で思っていた。

そんな俺の考えが崩れ始めたのは、あの時。

彼女が……光り輝く精霊族の彼女を見た瞬間から、俺の絶対は崩れ始めていた。エディアルははつきり言って、俺たち人間を嫌っていた。

精霊族は人と友好関係にあると聞いていただけに、俺としては何故？と驚いたのだが、そんな彼女はお人よしだった。人じゃないからこれは違うんだろうけど、彼女は本当に優しい精霊だったのだ。

「精霊族の私以上に人の事を知らないでどうする」

と、余りにも市井の事を知らない俺たちに、彼女は呆れたような言葉を吐き出しながらも丁寧に教えてくれた。

同じ事を何度聞いても、その都度嫌がらずに教えてくれたのだ。彼女はただの同行者。本当はそんな義務なんてない。

そして、人に捕らえられた精霊を解放し、彼女は俺たちには決して向けない慈愛の表情を浮かべ、傷ついた精霊たちを精霊界へと還

していく。

捕らえられていた精霊は、人を怖がっていた。俺たちが人という事だけで近づく事さえ出来なかった。

人は、絶対的な善ではないのか？

俺の心に、また一つの疑問が沸く。

けれど俺は勇者としての生き方しか知らず、勇者として死ぬのだと思っていた。

その心のまま俺たちは魔界へと足を踏み入れ、魔王を斃した。

俺たちは生き残った。

死ぬと思っていたから、これは予想外だった。

けれどそれは俺たちの勘違いで、必ず死ぬ定めだったのだ。そんな死ぬ俺たちを救ったのは、俺の心に波紋を起こした彼女だった。

彼女の光り輝く髪が、魔の色に染まっていく。

光の精霊として、精霊王に次ぐ力と美を兼ね備えていた彼女。

俺たちに、自分の為に生きてみるといい、転移の陣を発動させ俺たちを逃がした彼女。

最後に彼女が見せた微笑が俺の心を抉ったような気がした。

魔王は斃したのに、それなのに俺たちの心は虚ろになったまま帰還した。けれど俺たちを出迎えたのは歓喜に踊る国民と、表情こそよくぞ帰ったと感極まった王族たち。けれど気付いてしまう。俺たちが生きて帰ってきた事への戸惑いと不安と怒り。

何故？と、問う事は出来なかった。

彼女は魔の色に染まっていった。ひよつとして、俺たちがアレを受けていたら、俺たちも魔になったのでは？

そして最後まで抵抗し、俺たちが負ける瞬間に新たな魔王が生まれるのでは。

そんな疑問に答えてくれたのは、彼女が救った精霊たちだった。

俺たちは、元勇者であった魔王を斃し、次世代の魔王になり次世代の勇者に斃される役目を与えられた人間だった。

そのサイクルをつくり、人は絶対的な繁栄を手に入れていたのだ。

「はは…」

彼女は、俺たちをこんな世界を残す為に、一人あの冷たい城に残ったのだろうか。

「俺たちは…」

彼女は、こんな色を失った世界で俺たちに生きれというのだろうか。

「何故…」

彼女こそ光り輝く者だったのに、闇に染まらねばならなかったのか。

それもこれも全て、俺たちに俺たちの生を与える為だったのか？
自分の為に生きてこなかった俺たちに、自分の為に生きると言葉を残し、俺たちを人界に還したのだろうか。

俺たちが勘違いしていた世界に …。

この日を境に、俺は勇者としての俺を殺した。
これから得られる地位も名誉も何もかも捨てた。

彼女を犠牲にして得たものなど、何の価値も見出せない。

勇者と魔王の定めを作り出した人間。

利を貪る王族。

俺は勇者を辞め、俺は魔となった。

利を貪る王族を滅するため。

これ以上勇者という存在が生み出されないように。

俺は、光を捨て自身を闇で染め上げた。

エディアル。

君が俺の隣にいたら何て言うだろうか？

けれど、ね。

これが俺のやりたい事なんだ。

俺自身の意志で決めた事なんだ。

昔は銀色に輝いていた俺の半身とも呼べる剣。

今は黒曜に輝き、人の血を吸う魔になった。

彼女程ではないにしろ、光に染まった俺の髪は今では黒い光を放っている。人では持ち得ない魔の色。

エディアルと同じ色だ。それだけで愛しく思える。

「さあ…狩りに行こうか」

こうして俺は人を辞め勇者を辞め。

魔の眷属と成り果てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8263s/>

私が魔王になったワケ

2011年4月29日20時24分発行